# 層雲

十月號

荻原井泉水主宰

第三十五卷　第四號

昭和二十二年十月一日(毎月一回一日)發行
昭和二十二年八月十四日第三種郵便物認可

目次


鶏の聲……井泉水一
大難小難……井泉水二
小言……井泉水二
噴水のある風景（句）……井泉水三
添へ書……井泉水三
麗日壇（句）……四
秋の夜ばなし……井泉水四
清露抄……井泉水三
一枚月且……莖吉三
まこと……澄太三
飯ばかりの飯……北朗三五
明月壇（句）……三
句會通信……三
表紙……小玉邦彦
裏……別車博資



荻原井泉水著隨筆集

**耳順の書** 價五〇圓

青天の書、身邊の書……につゞく、層雲扉全集の一であつて、著者還暦の紀念出版でもある。その靜かなる慈味を味讀せられたい。

荻原井泉水著標註

**芭蕉選集** 價四〇圓

芭蕉の俳句と俳文の解説書は種々あるがこの著者によるこの書によつてこそ芭蕉の深奥に到達できる。俳句に親しむ者の必携の書である。

隨筆古陶の味出版紀念

**茶盌會**

一沫茶碗 一ヶ 箱入 金五百圓也 （送料共）

（茶盌不向の方は小壺贈付します）

荻原井泉水著

**アメリカ紀行** 價四五圓

原田實著 **俳聖芭蕉（上）** 價二〇圓

花岡謙二編 **日本植物歌集** 價三〇圓

花岡謙二編 **日本動物歌集** 價三〇圓

井上康文著 詩集 **山上の蝶** 價二〇圓

いづれも送料五圓、御送金次第お送りします。

東京日本橋室町三丁目 不動ビル

**寺本書房**


有隣亭蔵書

# 層雲

昭和22年10月

第35巻第4號（通巻409號）


## 鶏の聲

井泉水

一鳥鳴カズ山更ニ幽ナリといふ詩句がある。いろ〳〵の鳥が鳴く山村よりも、一つの鳥の聲もきこえない深山は更に一だんと幽寂なりといふのである。一おうは、それを賞揚する心境はうなづける。然し、私には―おそらく誰にも―それは淋しすぎよう。やはり、人間をはなれないところで、且つ、鳥の聲をはなれないところが一番いいのである。

私の家は、小さな山のふところ（鎌倉では之をヤツといふ）にあるので、鳥の聲はいつもきこえる。春のウグイスはやはりいゝ。夏になつて音を入れてしまふと、淋しい氣がする。コジケイは四時をえらまず、やかましい位に鳴く。呼子鳥ならば人なつかしげで好かろうが、こいつはチョウトコイと呼び立てるのが卑俗であつて、チト感心しない。冬になつて、ヒヨの近く來て鳴くのは愛らしい。他の鳥の鳴かない時は、スズメもなか〳〵好い聲のものだと思つて聞いてゐる。

さきごろ、或人からニワトリをもらつた。そのニワトリ、このごろはすこしも卵を産まないので、うちの者達には聞こえがよくない。だが、私は、かれの聲を聞くのをたのしんでゐる。まづ、床の中で、かれの聲に目ざめるのは好い氣持のものだ。ペンを執りつつ幾分うんじた時、窓の外で、ちか〳〵とかれの吟聲を聞くと、感められる。かれの聲は「鳴く」のでなく「うたう」のでなく「吟ずる」のだと思ふ。かれは、ノドだけでなく、ハラで鳴く。いや、そのからだ全體で鳴くのだ。其の聲はろう〳〵としてゐる。其の心はおほどかである。で、之を聞く者をして、のどかに、うららかに感ぜしめる。かれの聲を、私は

コレコウコウ……是れ好々……

と聞くのだ。私は―「日日是レ好日」といふ古語を大そう愛誦してゐる。良寛が書いた此の語を座右にかけてゐる。で、うちのニワトリが又〳〵日日、日日、「是れ好々」と鳴いてくれるのはうれしいのである。

―一九四七・九・一―

# 大難小難

荻原井泉水

「このごろ、御眼の方はどうですか」と、今でもときどき人からきかれる。眼を病んでから、もう十年以上になる。このごろは、見舞ふ人の方も、云ひふるしすぎて、今さら云ふのも殊更めきの方でも、今さら答へるのがテレクサイ位になつたが、事實は、悪い方の右の眼はもう快復する見込はないので、つまり、私は左の眼一つで用を足してゐるわけだが、今では、かくべつ不自由と思はないまでに慣れきつてゐる。

或夜、私の机のうへに一疋の馬追が來てとまつた。秋の虫のうちでも、まだ夏のすずしい好みといつた風な、みどりのすき通るワンピイスを着てゐる此の虫は、いかにも清楚といふ感じだ。私は、彼をスケッチしようと思ひついて、寫生帖を取り出した。彼は飛び立ちさうな脚構へをしたので、私はコップの下におさへようとした。コップのふちが脚にふれた。と、一本の脚はもろくもぶつて落ち、彼は一本脚のまま飛び去つてしまつた。昆虫の脚といふものは、いかにもたやすくもげて落ちるものである。だが、ここにやはり、かやうな昆虫類の自然の生理があるのではないかと思つた。なぜならば彼等が敵におそはれた場合に、一本の脚をギセイにすることに依つて、全生命を危地から脱しむる爲には、脚のもげやすいことが甚だ大切だからである。

私の友人のある醫者が云ふところに依ると、私の眼の病は、眼の中の血管が破れたのである。若し、腦の中の血管がやぶれたのだとすると、いわゆる腦溢血であつて、命をおとすことが普通である。さいわひにも、眼の中であつた爲に、その後、その眼は快復しえないとしても、命には別條がなかつたし、又、これを一つの危險信號と考へて、養生をすれば　決して損なことではない、といふのである。

私は、いま、机の上に片脚をいどもやすくと置きざりにして行つた馬追を見て、神の摂理といふものはかういふところにもある、といふことを感じた。私の幼いころ、母はよく云つた。大難が小難で……」と。なにか災難をうけた時に、もつと大きな災難が來るかはりに、この位の災難ですましてもらつたのだ、と考へれば、いつも、なにも悲觀することはないのである。

（二二・九・九）

---

## 小詩

鯉は、マナイタに載せられると
すこしも惡びれずに庖丁をうけるものと聞いてゐる。
鯉を切るのは上手の腕がいる、
夏百日百尾の鯉を切つて、料理の腕をみがくものと聞いてゐる。

いま、一尾の年老いた黒い鯉が
たんぜんとして法廷の特定の椅子に腰をおろしてゐる。
鯉は黒いモーニングを着てゐる、
鯉はピンとはねたりつばなしゲをもつ。

これに向ひあつて白皙の料理人が
さつそうとして發言臺の前に立ちあがつたところである。
彼は利刃のやうに一枚のメモの紙を手にし
何かするどく迫ろうとする表情
のメガネをきらりと光らした。

一尾の鯉は、被告荒木貞夫である。
料理人はコミンスカア檢察官である。

―極東軍事裁判にて（九月十二日）

# 噴水のある風景

荻原井泉水

山上　白いホテルの　見えて　かつこうの聲　泊りにゆく

書薬の光と　噴水が　水を　たたいてゐる　玄關

暗いほど　青く　噴水の　高く　あがつてゐるところの　部屋

ききよう　グラスに　水はつめたくて　口つけては　置く

ふんすい　ゆうぎらの　くもが　さかなに　なる

明星　たまのごとし　噴水は　空に　くだける

○

音は　噴水の　音ばかりで　星が　いつぱい

天の川　山の　噴水　よるも　ふいてゐる

ふ、もとは　一茂の中の　灯であるか　天の川原

○

そよかぜの　よあけ　そよいでゐる　はつば

聖書　開いてあつて　どこかへ行つた　子の　朝、日のさすまへ

おみなえしと　聖書と、風は　窓あけると　はいる

旅で　子供がよむ　わたしの　昔の　聖書、かつこう

噴きあがる　水の　ふきちる　霧は　はれてゆく

山山の　きり　うちでもきいてゐよう　ニュースきこえる

朝ぎり山を消し　山をえがいてゆく　ひえびえと　遠くにも　山

淺間より高く　噴いてゐる　水の　遠くまで　山

淺間　ふきおろす風の　草の中　萩は　花もつ

サロンの　朝早くて　客のすくない　トマトに　わりばし

白樺のいす　白樺のいうびんうけ、葉書きてゐる

---

## 添へ書

此の風景は、輕井澤千ヶ瀧のグリインホテルである。千ヶ瀧から淺間山麓の茶屋へ出るドライヴウェイに添つた山上にある、アメリカ風の明朗な四階建のホテルである。戰爭中は軍部で疎開用に使つて、一時はずいぶん荒されたが、此の夏、再び開業して、久しくとまつてゐた玄關前の大噴水がもとのやうに朗かな音をたてはじめたのである。

ホテルの風景は輕井澤すい一であらう。淺間山はすぐ近く手がとどく程のところにそびえてゐる。南の方は一帶に沓掛御代田あたりの盆地をひくく見おろし、遠くには妙義山から八ツケ嶽までを展望の視野におさめてゐる。

私は鹿靈山莊に滯在してゐる間、ここへ泊りに來た、鹿靈よりは三百米ばかりも高いから、一そう涼しかつた。再開業そうくで、まだ知られてない爲に、客は大そう少くて、ホテルには氣の毒だが、私には靜閑にしてうれしかつた。もつとも設備はまだ完成してゐないし、時節がら、御馳走は望めない。ホテル式だと云つても朝食は米飯にミソ汁、トマト位なものだつたのである。

# 麗日壇

井泉水選

まんげつのおおきさしばらくはかりがねをいれ　平松星童

ひとりたべるさびしさにもなれてたべることか

つきよの童話劇といつたような、燒原人が灯ともす

忘我、ときにひまわりきんのこなふりこぼしつつまわる

つきよのしらかべよりしづかにやんでゐるかほをつきに

まつのはなちるやんでやみぬいてひとはしづかな

荒物屋のまへ逝く家鴨に鶏の夕日がとどかずにくれる　北田千秋子

ハンケチにつつんだ木の實がなるほどの幸福

ひとひとりを愛しえずひとりひざをかかえてをる

海が近い夏雲をかつちりパラソルでうけとめてからの娘さんで

なんでも一山十圓まことと秋の空ではある

買ひたきもの鞦韆蝙蝠傘植物辭典春の日　賀立陶抄子

私七人の弟をもつ一つの火鉢をかこみ

ねる前それは句を思ふとき遠く汽車ゆく

現在の意識に生きてゐるだけのつめ切り鋏

自己という存在ここに春の日の畑を打つ

空を風を雲をおのれをのろうことばを

少年とラジオ技術教科書風は青葉からくる

春、木が影をのばす

落葉が海の見えるやうになつて道つけてゐる

# 秋の夜ばなし

井泉水

二百十日は日本全土として大體に好い日和だつたといふ。二百二十日は關東地方に台風が來たけれども、大なる影響はなかつたといふ。今年は全國的に大豐作らしい。もつとも秋田縣下の洪水被害はえらかつた。戰爭中に山林のランバツをやつたことが、今にしてたたつてきたのだ。秋田の福岡灰斗からの便りに依ると、私が彼の家をたづねた時の作―

二階は川の見ゆる老いし柳の秋の日はよし

その老柳の數本は根こそぎに流されたそうである。其後のハガキには――

洪水はその後さらに二度來ました。水量は以前ほどでありませんでしたが、稻にはもつとも悪影響を及ぼす幼穗形成期だつたので困つてゐます。でも、百姓としての希望を捨てずに立上りました。

とある。全國的にめぐまれてゐる中に、局地的に災をうけた秋田縣はいかにもお氣の毒だつた。だが、灰斗のやうに、誰もが、打ちのめされたままではなく、たくましい意慾をもつて起き直つたにちがひないと思ふ。

昔は或る地方が不作であると、その地方だけが困つた。不作の所の方が多くして、或一部分に豐作の

祭がすんだ子供きもの、ぬいでねる

夕日となつて刈田になつたばかりの田んぼ
いまにちちつてさざんかさいてゐる
星が冬木の上、冬木のなかもでてくる
泣いたなみだのあとが月うるわしく秋である

瀧山重三

じつに明るい日であつてつるもののさき
よこ顔なら月の明るさならうなづいてくれてゐるので
むねのどこかにあるさみしさをひるづきがある

松村邦夫

風ぐすりは白湯に添えて、風が月夜を吹いてゐる
ぬれて雨のあとの月、オルガン
風、星が消えてしまつた黎明を吹く
夏雲、船が波をつくりゆくびようびようたり

内藤善知

磯くさい堀が家裏すすかぜとなる
びわのきばむころは湯之町が雨になる
雑木もみち何處から流れ來る煙か
雪が二尺少女が雑子をさげてゆく
日なた署長さんと子供と冬芽もつてゐ
つぼみにしてさかせたおうきなさびしさである
まどをともしてほしがでた
そらをさがせばほしがあるまど
いつしようすなに字をかいてゐる木のはがおちる
つきよのゆううつ、このはがたくさんおちることぼく
つぼみ寶石のような咲けばさくら紙のようなちる
ていでんのろうそくのひかりのてのひらのうんせいのすじ
わたくしのゑとんをしいて星はカアテンでしきります

---

地方があると、其の豊作地方では大喜びだつた。そういふ不合理のことのいけないことは、今日ではよくわかつてゐる。天災を受けた地方には、できとうの補てんをするやうに、政府として施策すべきであらう。そして、全國概括しての豊作ならば、日本全體としては喜ぶべきであらう。

大戦爭以前までは、農民と都民とは全く別々の生活感情をもつてゐた。卑近な談が、夏の暑さが強いと、都民は暑くて仕方がないとコゴトを云ふ。農民は日照りが強くなければ米が出來なくて困るのだ。ところが、此頃では、運動欠都になやむ都民は、何よりも米の出來の好いことを望んでゐる。今年の夏はズイブン暑かつたが、それをコゴトを云ふ都民は一人もなかつたらう。農民と都民とが同じ生活感情をもつ、みんな同じ日本の國民としての感情をもつ、といふことはたしかに好いことだと思ふ。かういふことは大戦爭以前には考へもつかなかつたことである。

又、ずつと昔のことを云ふと、百姓は大きな不作では困るけれども、全國的の大豊作のために米の値のさがることを却てメイワクとしたこともある。一茶の——

米値だんぐつくと下る暑さかな

といふ句は「あれ〳〵此の上さがつてどうなろう」といふタメイキである。之とは反對に、芭蕉の連句

きいろくて月のようなあかくて花のようなうみぼうづきが鹽漬

そらがあかねしてゐてやぎのちちあはく　加藤裸秋

ういてゐるしづんでゐるかえるの世界である

きびにはきびの花良寛さまのおんうたかけて風がある　吉田六郎

牛が鹽しよつてゆく山のすみれ

やまが濃い家のうちかひとかつとる　鹽田正吉

短いともらいが屑子ひらひらつかつてゆく

一生箸をもち、灰となり、箸に拾われてゐる　大平羽人

夏、心しづかに梅の押し花あるところを讀む

鳴きやみしひぐらし遠くでは鳴いてゐる、時　大竹大三

風とうちわの風とふうりん

月が明るくしたり暗くしたりする石

こゝで學んでゐたさくらんぼが青くていまも子供達

あやめばな昔からの水車でまわつてゐる

蟻が葉のうへあるくけさは涼しい

灯がくだものを賣る店の灯、旅のまちで

山の井の水はつめたし櫻のもみぢ

あまのがは風となる舟を岸によせてゐる

蚊のあとともちちのはつてゐるちち

夕日のなかに月のあるみづうみの向うが山なみ

米のめしほしがる子にトンボとることにする

清水あり大樹にかぎつけた名まえそこにいこふ

あらかべにうつるほかげも山小屋

よせてはかえす波といわおと列車が通過して朝

星、出たあとの戸をしめられてゐる

---

に——

上のたよりにあがる米の値

宵のうちぱら〳〵とせし月の雲

この「あがる米の値」をよろこんだのは百姓であるから、それは當然のことだが、都會に住んでゐる武士とても、その碌（今日で云ふサラレー）は何石取といふ風に米單位であるために米が安くては金に代へて少額となるわけだから、サラレーマンも亦、米が安すぎては困るのだ。さういふ時代——米穀多くして人間の少かつた時代にくらべると、今の時代の暮らし難いことは勿論であるが、四つの島に制限された國土はゴムのやうに引きのばすことも出來ないし、產兒制限だとてキウの間にあることではないのだから、將來、「全世界的政治」といふ立場から、全世界的に人口の再配置といふやうな、世界的大政策が實現されないかぎり、日本人は年中、天候を氣にしてゐて、豪館のもたらすものを喜んだり悲しんだりして暮らすより外はないのであらう。少しも早く、かうした心配から拔け出て、朗かな生活をする日本となりたいものである。

×

農業の事に私は全く無智であるけれども、友人の或る農學博士の云ふことに、日本の農業技術といふものは、神武天皇以來、かくべつの進歩をしてゐないと。——先日、靜岡縣下の登呂遺跡の一部が發掘さ

いけひの色が大きさがふるさと青田　佐藤尊子

ひるがほのすぐそこまでみちしほ

いんぎんにわたしの部屋の前を通る花もつて通る　親井牽牛花

鍬は鍬かけに洗うてかけならべ涼しき

花屋の鏡に口紅つくろうて、すずしく

別れぎわのそぶりはやみに匂う木　水谷青史

草に　炎天の石　となる

懐古といふは森一つ夏をかげする

茶店のおうなそれぞれに茶をおき秋山しづかな

あぢさいの花や晴間があつて干しとく　上柿小平

何とはなくよりそうて萍みてゐた

きりぎりす、醫者をはなれると炎すえてゐる

病めばうちはから貰ふ風も、花火が上つてゐるそうな　佐藤蚤明

泳いできて白い足うらをふく

そうめんの上の氷が三つ四つの初盆

お祭の灯の下が金魚透明

祇園ばやしがきこえる家はせまくともお祭り

茄子、漬けたの燒いたの煮たのくらし

海から出る太陽をみてきて淺漬けの茄子

いきてかえつてそのはなしするひとみである

炎天たくましい藤つる殿に水浸みでてゐる

石にかげうごくおれの代になつてとちの木

いちめん稻草のびるたしかなるいろいでて薄雲

日がさしてきて出水のあと暑い唐葵二三本

便りなんにもこない黍の風ふく家にふく

---

れたが、原始時代のクリやスヤも今日のクリやスヤも大體同じ物であることが解つた――彼の友人又曰く、日本の田地は二千年以來、そこから取り上げつづけてゐるので、土の力が大體はショーモウし盡されてゐる、將來はなほ〳〵潤渇する一方である。ただ僅に、肥料をもつてダマしてゐるといふわけだから、肥料不足の今日、不作の方が當り前であつて、豊作といふのは、よつぽど惠まれた例外の場合であると。談をきくと、心ぼそいものである。

私のきわめて短い視察を以てしても、カリフォルニアの農業はえらいものだ。カリフォルニアでは、第一に天候といふものがきまつてゐる。夏の照る時節には、照る一方であつて、雨は決してふらない。水は、電氣裝置をもつて地下水を揚げて、やはり電氣の力で灌水するから、乾きすぎることもなく、濕ひすぎることもない。刈り取りでも、脱穀でも皆機械でやつてしまふから、世話はない。毎年豊作にきまつてゐる。不作があつたならば不思議だ。これを日本で、いかに眞似ようとしてもそれは出來ない。日本の天候といふものが元來キマグレである。機械化しようとしても、土地が狹くてデコボコだから不都合である。一體、日本といふ此の四つの小さな島が近代の農業には不適當の土地がらだと思ふ。大きな目で世界を見れば、天の作つた農業地は廣い處にたくさんある。日本人に米を食ふのをやめて、パン

花と朝日がいつぱい南瓜のはたけ　岡田浪千

あれたあとの雲が千切れてゐる月夜　塚田虹子

店さきつばめ巣をつくりあきなうものに日がさしてゐる

あつくてひる涼しくて夕べふるさとお盆　上野忠三

草をくぐりてゆく水よ草の中あそぶ子どもよ

みかんの實まろくて青くて小さくてまいにちせんだく　長澤元茶

二つの川がひとつになりて山をうつしてゆくのです

雪どけ、牛のつながれて電柱にもう紙芝居も來てゐる　小松さとる

さくら美しいとはふそうかと思ふただひとり

家の前子の遊んだ白壘のあとも月夜である更けてかへる　丸山素仁

一雨ふつたえんどうのさや

雷の子水をあびてゐるひるの雲が夏のようす　原田赫城子

むしろさびしいとおもふ程の湖の色かなかな

鐵棒の往きかべりがもう無のゐなくなつてゐる空

蟹ば暑くて夜は涼しくて音がふうりん　山田こころ

月が西へ落ちかかるので流れてゐる

落して目にも見えない種をまき達者なことは

星がふりそうな夜で海まできびばた

蝶に蝶の影が私に私の影が毎日ひでり

白い雲にさかなが水の中

花の影が壁を夜る

雲を泳いでゐる

早乙女のみのかさぬいである晴れてゆく

葵の花がさくなにかとりごみのようでもある

すうと見渡せるひかげりし田のくさとりが出てゐる

---

を食へと云つたとて、無理である。そして、シャムやビルマのやうに、米作に適した土地では、肥料をやらなくとも、米が出來て仕樣がなく、土地では食ひあまして、軍でふんで歩いてゐるといふ事實ではないか。して見れば、將來、これはどういふ風に配分するのが神の心にかなつたものか、といふことは、誰にも常識的に考へつくことではないかと思ふ。

世界は一つにならなければいけない、それが神の心だ、といふことは、この點からも考へられる。もつとも、これは何千年先のことかもわからない。だが、少くとも、有り餘る物をもつて、足らざる所を補ふといふ自然の法則は、さしあたつて實行されなくてはならない。講和會議も如く正式に開かれようし、貿易も再び行はれようとしてゐる。これが正しい軌道にのりきへすれば、今日のやうに窮迫した狀態はだん〳〵と緩和されてゆくにちがひないと思ふ。

×

美術の秋と云はれる。九月一日を以て、上野の美術館では、院展と二科が、例年の如く隣り合つて開かれ、三越では青龍展がふたをあけた。院展、即ち日本美術院はことし、創立五十週年紀念として、同人が力作をそろへ、將率格の大觀は山水圖卷の大作を出すといふ評判は前から聞いてゐた。私はさつそ

うれしむせるような空のにちりん　降矢百峰

白い花は、目をつむつても咲いてゐる　櫻田輝郎

ぶどうがぶどう酒のグラスにうつるほどな　印南健二

こどもに引かれて馬の従順な三日月さま　福永夏木

ことしむねの上にもろうた盞で病んでゐる　背崎道雄

別れてからはないばんあきらかな星に、をる　武田桂

妻があらばとおもふ蕨の花友の家にもさき　鈴木芋村

蟬鳴く中のひぐらしにして山のみづうみ　篠崎青鳩

ふうりんの風、ひるもかやつつて病んでゐる

海がちかい川のふさとすうつと青田の、バスでゆく

ゆうぐものひかりをもつときのひまわり

言はずにおくことふかくもちはにはにきびしく冬

蛙あと青いのが翔ん月へ犬が吠えとる

棟上げした家がぬれてゐて雨が花どき

しづかに春の灯をともしてからの月夜となる枝と枝

降る雨がしづかな愛情のような木の桃にふつてゐる

ざくろの花がどしやぶりの雨

はだかでせみがないてゐる

日々好日日々落葉掃きためてゐる

子に叢はれるとしを思ひ炭の乏しき冬を思ひ

冬日がきつね格子の錠にあたると木挽さんお茶にしてゐる

よいおしめりでしたありのあな

木がうすぐもり月夜

話もなくなつてゐて涼しさは壁の蟻

夜明の太鼓だんだん早く打ち、打ちをはると南瓜の花

---

く、院展を見に行つた。新聞が今年は美術の秋につ
いて、宣傳風に書き立てなかつた爲か、場内は大そ
う閑散であつて、觀賞するには、好都合だつた。こ
れが正常なのだらう。以前のやうな、ゴツタカヘシ
の見物はただ人の見るものは見たいといふハヤリモ
ノ心理だつたのである。

さて、大觀の長卷「四時山水」といふものは雲海
の中にそびゆる愛鷹風の上に朱泥の太陽が登つてゐ
るところから始り、富士山の雪、これが正月だら
う、それから、殘雪の峯、梅林、海、松に櫻、山
峽、霧、柳、燈籠のある街、竹林、柿の木、秋草の
原、渡り鳥、紅葉、大原女、鳳凰堂風の建物、五浦
風の渚と推移してゆく、春—夏—秋—冬と風景が四
季の推移をしてきたわけで、最後に遠山の雪に大き
な下弦の月が出て、長卷は終つてゐる。繪卷のこと
だから、一つの風景から次の風景へ渡るのに、しぜ
んの續きがなければならないが、雪の山から櫻のさ
く山へ續くわけには行かない。で、一つの風景が
しぜんと海になり、その海がおのづから眼界を區切
つて、次の新しい風景をおこすといふ手法を用ひて
ある。或は、一めんの霧の原となり、そこに一羽の
鳥が飛んでゐると見て行くと、春から夏へと一轉し
てゐるといふ風だ。昔の畫では、カスミといふもの
を使つて巧みに隠したのと同じやり方で幾分安易な
感じもする。しかも、終に近いところの五浦風の渚

木洩れ日木ぶかく山のたけのこ掘りにきた　平つねを

どじよう釣るカンデラへ通つてお晩ですよ　小牧二郎

夕風にゆれるかんびようの白きも旅にゐる　白石默忍冬

木々はやくらくひぐらしふつと啼きしすむとき　白戸石路

ゆうぞら七夕さんの笹たてて家の裏流れてゐる　井形春一

こんやは火をふかない阿蘇で蜻蛉に風の出てゐる　中村吉味生

おんどりないた後の百日草の赤や黄や　青まさよし

蔦の青いホテルの今夜ランプですといふ　照井燈光

酒藏のうらまでたつぷり潮がみちてゐる夏　佐藤仙一

枯木のかげがながくなる牛をしかつていく　阪部蝶三

少しはやいとだされる桃の味ゆうべのそら　鹿島默太

花がゆしくなつてくる月にはつぱ　佐藤青美

思ひついて種物屋に寄つて夕空が夏　佐藤龍

すだれごしに氷かく音してひともし頃

荷馬車役者をのせて夏のある日が沈まうとする

雨ちよつとやんだまのおとむらひが通る

てふてふ豆の芽大根の芽ととんであたたかい

朝を白うして降る雨が遥河のはば夏めく

よい娘となつて繪日傘えんどうの花が眩しい

柿の花がこぼれる博勞牛歩ませて居る

もろこし穂が出た白いシャツの干してある

厳に立ち厳に坐り昇る月を待つ

灯ともせば暮れてゐる青あし

繞跡にごまの花咲いてゐておとものらひ

見わたせて雪つもる

から遠山の雪へ一轉するところの空白は、どうにもならない空白のやうに感じられた。此の點は往年の大作、「生々流轉」の水の動きつつ移りゆくさまが、ちぎれ〳〵でなくて、そこに一貫したる移りがリズムをなして感じられたのとは違つて、今度の圖卷は其中に幾個かの句切りがあつて一つ一つに息を入れてゐる。それが圖卷としての生命を多分に稀薄ならしめてゐると思ふ。筆勢もまた「生々流轉」に見られたやうな、力のあふれかゝる勇渾さはなし、筆致がこまかく行きとどいてゐるといふものの、せん弱といふ感じも蔽はれない。とは云へ、齢八十にして、これだけのコムポジションをする元氣はやはり大觀にちがひないのである。

大觀よりは幾分若いだらうが、觀彦も七十を出てゐるだらう。その觀彦の「王昭君」は、實にみづ〳〵しく美しい繪である。おそらく、日本畫といふものの美しさを極度に發揮したものではないかと思ふ。王昭君といふ悲劇の主人公の勝氣であると共に諦觀的な性格をまで現すといふことは、むづかしいことだが、この單純なる目のふちの線の中に點じられた一點のひとみがかなり其を暗示し得てゐることは、いかにも名技だとおもふ。全體に、鹽と朱と金との諧調から出來てゐる、非常に華やかなトーンの中にえりの白さと、挑いた手をつつんだ袖の白さとが大そう品位のある落着を與へてゐる。畫面は大き

枯草谷が見えて冬になるせせらぎきこえ　小松粒三

夕べ枯木に雨がきて鋼寶りにくる　佐藤鈴村

しかと月が照つてをり石垣のある道　小林不未鳴

竹の葉に風のあるうちわ　品川幸一郎

炎天へレールがのびてゐる海が白涙　富永谷衣

歩いて雨やんで居る　淨心寺惇

蕗が花つけて坂道、牛追うてゆく　遠藤虹水

おそい雨になり祭りの灯を消りてゐる道　名雪理輝

田ンぼもいい月の夜となるうちの冷しうどん　三好草一

子を佛にして戻り荒れ模様の海にかもめのゐる　里井正子

働きつめて冷しそうめん　物部卓郎

月に寄せて自分の下駄がこれ、をはく　矢内樹一

自分の落葉の先生がちよつと手を入れた落葉の句になる

コスモス風にゆらぐ日がりよううらんとゆらぐ

くらい中灯した一軒が本屋で本がぎつしりとある秋

しぐれやんでゐる柊の花にて

朝日なかなかさして來ない前山湯をびく湯のけむり

學校、學校園、光と影とがいつぱい梅雨はれてゐる

病人屋根ばかり見てゐるらしく時たまそこにくるせきれいを言ふ

さくらくちば木についてゐるとゆれてゐる

月が山の線をあかるくするとあかるいとうきびばたけ

なにおもうとてなき死顔の冬の蠅を追ふ

秋からふゆへのはたけの土に鍬いれてゐるとしより

月のただ中に枝二三枝の葉が殘る

櫻紅葉が川に映り人の行くのはお湯に行く

---

くはないが、寸分のスキがなく、いかにも完成した作品だといふことを感じさせる。やはり現代隨一の作家は靭彦だと思ふ。

前田青邨の「郷里の先覺」と題して、「夜明前」の人物ふたりの對坐をかいたものは力作である、香藏と景藏とのにがみ走つた顔もよく出來てゐる。多少、安本亀八（菊人形の名人形作り）風の表情と似通つたところのないこともないけれども……。

太田聽雨の「箏」は立箏を大きくかきその前に盲檢校をしづかに坐せしめたもの。潤一郎の「春琴抄」をおもはせる。琴絃の直線の張りきつたリズムの強さと、女性のさびしいかぎりに靜かな表情と、大袈裟の曲線のなよやかなリズムの美しさとが、常に好く調和して、幽婉とも云ふべき一つの境地を創作してゐる。これも、日本畫の技法を以てのみ表現し得る一つの世界だと思ふ。

私は、足を轉じて、青龍展を見た。場所が三越である爲もあらう——入場無料といふ點もあらう。ここは大そうな入場者である。その日は、あいにく節電日で、照明が暗くはあつたが、他の日に改めて見に來てほしいと主催者側のことわり書がはり出してあつたのも、行き屆いたことである、と見て、金三圓也の目錄を求めてはいると——

先づ場内を駐してそびゆる如きものは、龍子の

朝は雨音のする桐の葉　泉恩三
藪柑子よい雨で石ぬれてゐる　新納香樹
ざくろの花かまくら山はみどりにして住む　瀬川水晉樓
ザボン舟にのりて歸ろう月は滿月（シャム）　岡本健一
てのひらほどのうちのはたけのつまみ菜です　齋藤青圃
梅の木の若葉と白い蕾子のここからは燒けないでゐる　金山光曉
蓼たたきは向ひあつて今日の暑さの二人　尾形夫知郎
日がてつて又ふり出す通り雨のその方も蓼の畑け　小原甲陵
ことことときざむ音に虫なかせて居る　齋藤てつ人
酢がきいてとろてん涼しい夕空　三浦香女
雪に朝日さして影がまばらにたちたる家　山本篤子
暑さ、やけのこりたるくらに雀子をもつてゐる　高崎貞之
どうやら涼しくなつた痛いところみんな藥つけて、ねる　佐々木味化
母のぞうりはいて兄の鎌もつてまぶしい露の中ゆく（生家にて）
お羽黒とんぼ刈られた草が流れて來ます
月がかくれて風が少しある花火
二度とれて二度いもといふみんなでたべる
手のまめがごそごそと暑い日の無事な日く水
水音は草の中山のはれてくるを
遠雷、あたふたとてふてふは來たり
いまはただ生きる事を、とうきびは穗となりて
針に白い糸とほす秋は陽ざしのかげり
沼に山のかげッ梅雨はれてゐる
からだひとつを引揚げて來たこたつの上のさかづき
木の上の月が井戸のふたにさしてゐる夏

---

「虎の間」だ。京都南禪寺にある探幽筆のふすま「水呑の虎」を以て有名なる「虎の間」に、作者龍子其他の三四人が立つて之を觀賞してゐるところを、龍子がかいたので、此の作中には、探幽の虎が主題ではあるが、龍子の自畫像もかかれてゐるといふ、めづらしい取材である。かやうな、前人の試みない何かをやろうといふ龍子の野心は、これまでも、展覽會ごとに發露してゐたもので、そこが青龍社展の一つの性格であり、又龍子その人の面目でもあつた。かやうな「野心」（アンビション）といふものは、凡ての物の進歩の推進力となるもので、決して惡いことではないが、そもく繪をかく、その讀因といふものは、凡ての野心風の心境をはなれたところに純粹な藝術的の感激（インスピレエション）といふものが宿るのではないかと思ふがどうか。私は、龍子がときく、野心のない、素直な氣持でかいたものの方に、好感をもつのが常である。もつとも、「野心」といふものは「若さ」と相棒たるものであつて、龍子の色彩と運筆とには、いつもはつらつたる「若さ」がみなぎつてゐる、その「若さ」は將來とても失つてもらひたくないと思ふ。

坂口一草の「妍華」と題して牡丹をかいたものは力作であつて、又佳作。これほど牡丹といふものを四つに組んで大ズモウを取つてゐる圖は古來少いのではないかと思ふ。「夕立」の一圖も、雨の勢ひがよ

一枚白いシャツ干してあると白いてふてふ　木村乙羊

ひとりでは遊べないこどもとおばさん山羊ないてゐる　大山澄太

まんまん水あつて渇打瀬のならんだ帆が秋立つ　我妻覺神朗

空がとうめいで朝のはだかはたらく　天沼棗人

箸を茶碗をめいめいに洗ひ朝の蜩　小西佛舍

桐の花晴れ上つた朝の涼しさをゆく　増村辰郎

楓赤い葉をひろげ憲法發布の朝が雨　古瀬雪里子

空地このごろ道がついて月夜の野ぎく　宵木青華

桑山木の花朝になると牛乳をおく　金平二火

月かげが夕がほに女ゆあみしてゐる　森田十雨

一週忌の母のつくつたはえたたきです　渡邊天仙果

朝虹、そうして草刈り馬のぬれてくる　内久根聖己

日盛り、竹に竹のかげしてゐるところ涼しい

夕やけにあり　まくわとすいか

忌日にびわあげる六月きいろのびわ

水面にひろがつて秋の白い雲飛ぶ魚な

ふな釣る竿はもつてざこの見えてゐて秋の日ざし

秋の暮は石段から掃いて掃きおろしてゐる

すこしは眠れて誰かに似てゐる顔が寢てゐる(車中)

赤とんぼ亂れとび雲は厄日の亂雲らしく

暮れると戻る雞が白くてけふも暑くて

小鳥の足音が屋根に來てゐてさざんかはつぼみ

霜がきびしい日がさせば起きる蠶豆で

伊豆の下田の女がうちわで川にも灯のつくところ

あめがあぢさいの花にやんでゐる

くかけてゐる。

それから「目錄」外の小點ではあるが、瀧子の「東山十題」は面白い。かつて「秋果十題」(?)といふ風な、同じ行き方のものにも感心したが、いはば牛刀をもつてニワトリを割いたといふ感じで、その一氣に行つた元氣さと、ラク〳〵とやりおほせた顯かさとが、見る者の心を、大そう和やかに樂しませるのである。蕪村の晩年の略畫とも通じるものでそれともちがう。「法然院」「東山春月」「銀閣寺」「八坂の塔」は殊におもしろいと思つた。

×

鎌倉のはぎい花がさきはじめた。或日の夕方、建長寺の境内のはぎを見ようと、久しぶりで、巨福門をくぐつた。國寶の鐘のそばに崖から咲き垂れてゐる、はぎは果して美しかつた。そして、その傍に立つてゐる句碑は、いつも通りすがりに見てゐるもので、少しもめづらしくはないが、此時は何となく、佇んで讀み直した。

咳一つきこえぬ中を天皇旗　劍花坊

これは俳句ではない、川柳である。大正の初め、古い川柳、即ち「狂句」といふものを革新して「新川柳」を樹立した井上劍花坊である。劍花坊は、建長寺の塔頭の正統庵の和尚と心易くて、その正統院を忙しい仕事をする爲の「かくれ家」にしてゐた。そこで原稿をかいて徹夜などしたりした末に、腦溢

木馬のみち木馬をおろしてきて橋の手まへのところが秋　井手逸朗

つゆくさの露いなほのつゆいなほは垂れてうれてゐる

山の中のいねのほのたれて音もしない道　山本木天蓼

山の家のあほうが柿のうれたのもつてゐる秋　飯尾青城子

臼ついてゐる音の薬がちるいつまでもついてゐる

そのあとすむ人のくらしもみえて山茶花ちるころで（橋畔亭）

あるじがおこすしちりんなかなかけむくそんな秋の夕を（稻市居）　古林巴水楼

しぐれにぬれてしいのみ

ぐるつと植田になつてゐるあけはなつてふすま繪の虎　東松八洲雄

家にちよつとひさしを出し種物賣り秋あつい

秋風やヴキオロンまださがつとる古物屋のげてものも　柳田流矢

糸瓜の蔓に糸瓜ならせてゐる所へ東京のお客さん（稻市氏）

普請が荒壁のままで木の芽ふつてゐる雨　木村緑平

新築の家の灯が暮れようとする山の青葉

みんな出ていつて獨りになつて冬日の障子

月夜になつてさらに竹に風ふく

花、花と石楠花にしてゆく堅も彩はれてゆく

かりんの花白くて月夜は製糸工場の横にある道

花曇りの湯町の土産に椎茸餅もつけ賣る

栗の花の匂ひ雲が雲追うてゆく

ひとりで生いて籐草となり青くて雨

菊に日があると蜜蜂のまだゐる日の暮

日がくれるとにわとりの水月がさしてゐる

にはとり買が歸つていつた花の下はく

ねるまへの月をたがくないてゆく

---

血でたおれた。墓も正統庵にあることを聞いてゐた。私は一度も其墓をたづねたことはなかつたが、此日はひとつ墓まいりしてあげよう――と、そんな氣がした。私の足はそこから二丁ばかり奥の正統庵へ向つてゐた。

私と剣花坊とは、すいぶん昔い知り合ひだ。彼がまだ川柳に指を染めない時、彼は「秋剣」と號して、俳句を作り、秋聲會派だつた。私はその頃、「俳聲」といふ雜誌を中心とする句會へたびたび出かけた。松宇、麥人、無黄、猿男などいふ連中が宗匠株で、剣花坊の秋剣はさうした株ではなかつたが、會では重要な存在であつた。又、その偉大なる體格と、グリ〳〵した目玉と高く朗かな聲と、ときく一座を吹きまくるやうな爆笑とは、甚だ印象的だつた。年齢は私より十才あまりは年長だつた。毎月一度は少くとも句會で膝を並べた。句會に彼が居ない時は何となくさびしい氣がした。

そんな古い記憶を思ひ出しながら、私は正統庵の墓所へ上つて行つた。墓はすぐ見あたつた。――「井上剣花坊之墓」とあり、碑側に「剣花坊歸幸道一居士」「昭和九年九月十一日沒」とある。私はハツとおどろいた。此の日が九月十一日ではないか。私ははからずも、その命日に、何となく、此の墓へ來たい氣がして、足を運んできたのだつた。何年になるか、指をかぞへてゐた。ちようど十三年目にな

やまでらしらゆりきりがはれようとするこころもはころもかけに風のあるかなかなもらひぶろの湯かげんがとうきびの葉しん月クレヨンの長いの短いの日ざしがもう夏である机鐵橋の影の蠕動がさみだれの川の面汽車に石炭をくべる仕事にいそしむ夏あさ托鉢まいらするお坊さま炎天をゆく

**黒山嘯雨**

水田いつぱいの雲の田の草とる

**小澤武二**

雨ばれると蝶々トマト花さく

**江良碧松**

ぢつと白い土藏の壁が稻刈り終えたので

**原農平**

白雲層々若竹眞畫の皮をぬぐ

**藤澤せいじ**

雲をはなれた月でひろいみちをあるいてゐる

**松尾あつゆき**

窓のそばに靑い樹が立つてゐるのでジョパン幻想曲耳もとでかなかなと鳴くとほくでもないてゐるじやがいもがぞろつと土間に郵便投げ込んでゆく

**內島北朗**

宵道の先生端然と帶して紫陽花のはなが庭さき朝の日は石たたきが來る池の面にでてゐる石たべられるくさをつんでゐるなつのふかいかげのなかうみにのこる日がかげつてゐる萱ひさしぶりゆめにきたつまにいひわすれたことつぼきのはなのいろもつきのせかいとなる

蕪も土も花びらの雨の日

兎の箱の白い兎たべてしまつて梅雨杏の實がうれて落つる道を聞くいよいよ米のありがたく白々と夏夕べ

---

るのである。

私は歸つてから、劍花坊が主宰してゐた「川柳人」といふ雜誌をもらつてあることを思ひ出した。多分、靑葉町に殘して來て、燒いてしまつたろうとも思ひながら、手あたり次第にさがしてゐるうち、ふしぎな位に、すぐさま「劍花坊追悼號」といふのがあらわれてきた。私はそれをむさぼるやうに讀んだ。

葬にも出られずに身のまはり草の花り　井泉水

といふ私の悼句も、それに載つてゐた。私が、光明寺にゐた時である。鎌倉で近い所にゐながら、告別式に出られなかつたのは、多分風邪で私は寢てゐた爲めかとおもはれる。

追悼號には諸家の筆に成る記事の中に、生前の作品もたくさん紹介されてゐた。私は「劍花坊句集」を所藏してゐる。近いうちにそれを再讀してみたいと思ふが、此の號に出てゐる句のうちでも——

むらさきの富士へ日の入る大晦日

絕壁へ來てほんとうの眼をあける

人を皆人と思ふて腹が立ち

ひきがへる石をのせると目をつむり

これらは新川柳として面白いと思ふ。

なほ、劍花坊は晩年には「川柳詩」と稱して、自由律を主張しはじめた。「五七五を意識して作句してはいかん、わしは川柳は皆自由律ぢやと思つとる」